# 毎日歌壇

## 加藤　治郎　選

図書館で朝刊めくる老いふたり十時ちょうどに陽のあたる席　東　京　青木　公正

△評▽ふたりは顔なじみかもしれない。日のあたる席と時刻を知っている。すてきなことだ。日常的な幸せを感じる作品である。

冬のバスこごら辺では光るんだね遠くからみる青のきらきら　横浜市　大原　香花

△評▽遠くの街に来たのだ。青い光が冬にふさわしい。夢の風景のようでもある。

見たこともない人はまだやさしくて新築のすりガラスのあかり　四日市市　早川　和博

雪野原たどり着けない鉄棒に使用禁止のテープはためく　札幌市　橘　晃弘

ぷりぷりの海老たっぷりの海老麺はお店とともに消えてしまった　川崎市　船山　登

両腕にリボンをしてる　両足にリボンをしてる）　踏切りを踏む　平塚市　芝澤　樹

冬の陽が乱反射する寝室にもこもこピンクがむくりと起きる　京都市　小川　ゆか

そして今、日付が変わる。パーキング・エリア喫煙所のあかり　雪　雲南市　熱田　一俊

思い出は四角になること　懸命に削っていたら真砂消えた　東　京　カ　ヒ

コンビニのケーキのフィルムのクリームを綺麗に取った無色の一日　横浜市　友常　甘酢

## 水原　紫苑　選

ひとが鳥だった頃のことおもいだす　レースがあればとべつになる　横浜市　大原　香花

△評▽上の句と下の句が離れているが、どこかでつながっている。レースが呼びおこす鳥だった歴史。

記憶から雪へと変わる速度　あなたは祈るとき目を閉じている　京都市　よ　だ　か

△評▽記憶の向こうには雪が降るのか。それを知る人が目を閉じるのか。

雪だねと否定できない現実を傘と一緒に突きつける君　札幌市　橘　晃弘

地中には根っこが走る太陽を知りたくてただ手伸ばすから　神戸市　入間しゅか

凍蝶はあらゆるものに拒まれてあらゆるものを拒み凜凜たり　名古屋市　浅井　克宏

いま雪へ倒れたならば呼ぶ声も消え空も地面もいちめんのしろ　宮古島市　塩見　佯

原始的な感情に浸りたかった　午前4時に焚べた脳みそ　東　京　カ　ヒ

おもひでがまざってきみのゐた日々がうすれてしまふ　光だからか　さいたま市　住谷　正浩

水面にスーラが転生したような逆さに揺れる街の点描　フランス　小仲　翠太

なにか問うこともなくしているきみと真冬の空に星屑吐いて　平塚市　芝澤　樹

## 伊藤　一彦　選

選択肢A、B、Cにこれからの僕の手綱を渡しはしない　鳥取市　中之島　潤

△評▽他から与えられた選択肢のどれかを選ぶのでなく、未来をどう生きるかは自分で決めるという歌。「手綱」の語もいい。

冷え切った言葉に慣れてしまったら冬の洗顔つめたくはない　池田市　黒木　淳子

△評▽厳寒よりも心身にこたえるのは人の冷え切った言葉。それは慣れることがない。

「体力が限界なので」と紙のありビッグイシューの人ゐし場所に　横浜市　谷口　菜月

業績不振の責任を社長がとるように暦は外されれ新しくなる　静岡市　柴田　和彦

ゆびさきも自分なんだとわかるんだ冬の配達おわりの夜は　浜松市　尾内甲太郎

つつがない日々の幸い噛み締めていつもの倍の食器を洗う　山形市　神谷　りん

真夜中に屋根から落ちる雪の音　熊が来たかと一瞬怯む　由利本荘市　佐々木静江

駅伝のゴール見届けわずかなる晴れ間に急ぐ年初の雪かき　北広島市　富丘　治生

褒められるたびに咲く花、成る果実　わっさわっさと勇気をくれる　武蔵野市　北谷　雪

目の奥に月が沈んでくるくらい月を見ているわたくしは池　加古川市　山田　麦

## 米川千嘉子　選

リヤカーを引く自転車に道ゆずる宅配なしではもう生きられぬ　東　京　富見井高志

△評▽宅配業者が使うようになって、リヤカーを見かけることが増えた。結句はけっして大げさではない今の実感だ。

長ネギがとびでた袋のようでした　人が恋する時をみました　松戸市　渡邉　理紗

△評▽恋というのはいきなりで隠しようがないのを人に見て驚く。比喩が楽しい。

娘のおせち器は若きの趣味なれど味付けは祖母盛り付けは母　村上市　杉江　正子

年賀状六枚来たり友四人少なくなれり大事にしたし　大阪市　岡田マチ子

樹木葬山の小さな息子の墓よ近くに伯父さんも越して来たるよ　吹田市　鈴木　基充

白内障の手術成功したる夫今日もゴシゴシ風呂場磨けり　流山市　塙　葉子

お遊戯会年長の孫りりしくも膝のまるみに幼の名残　大阪市　鈴木　雅子

強く降る雪に散歩を諦めてこもれば妻とばらの絵をかく　仙台市　小野寺健二

「まいったな」小声で言ったはずなのに書き留めていた律儀なiPhone　宮津市　野ばら

寒き朝吹きとばさむと唄うたふ　吾のどこかに唄住みついて　幸手市　中村　早苗

---

**投稿規定**　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます